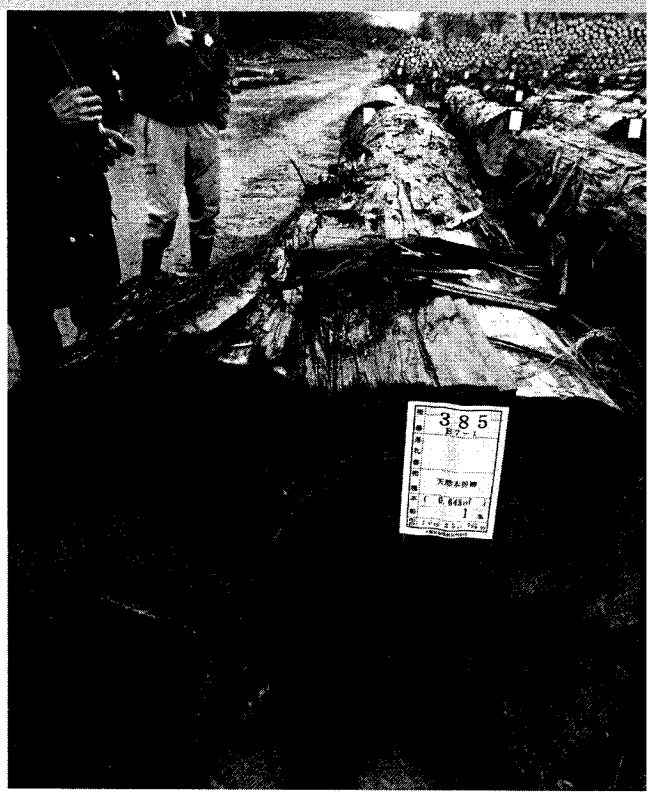
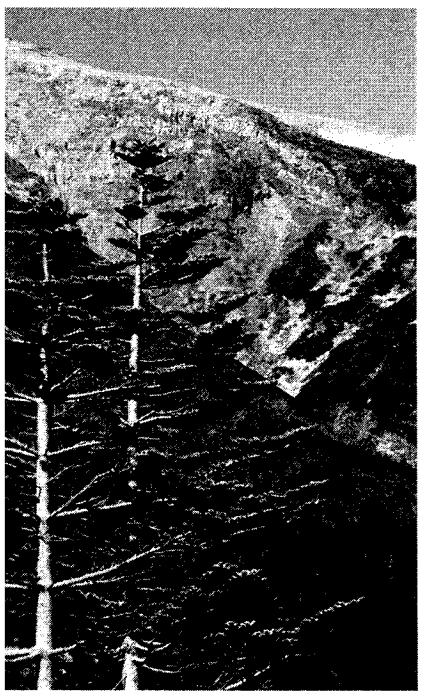
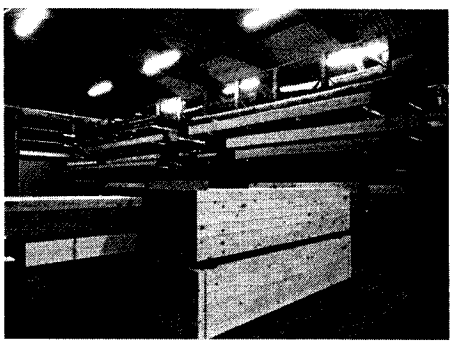
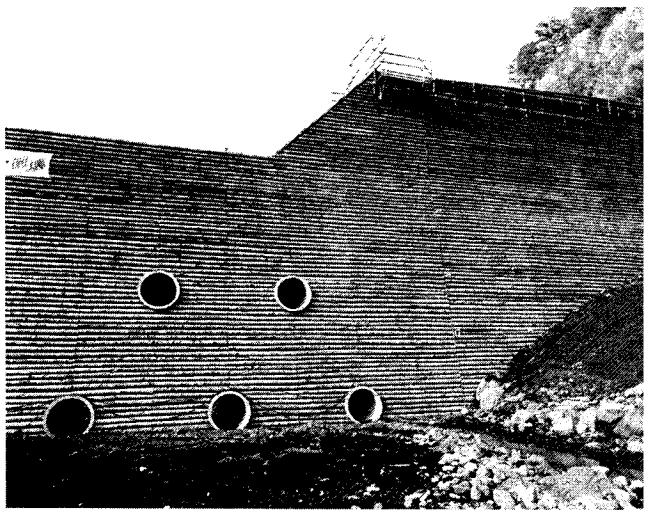
林政ジャーナル

日本林政ジャーナリストの会
2017年
3月13日
No.58









木曽谷・御嶽山共同取材

治山・緑化事業の大切さを痛感（上松 寛茂）……P.2
灰色の無法地帯に蘇る緑の自然（今藤 洋海）……P.4
木曽谷紀行（古川 興一）……P.6
御嶽山噴火で治山ダム浚渫を決断した名もなき男たちの栄誉に想う（篠原 宏）……P.10
木曽ヒノキを競る巨木並ぶ土場は圧巻　台湾の阿里山への想いも――（海老澤 秀夫）……P.12

定例研究会

江戸城天守の再建構想（土屋 繁）……P.14
ヤマに求められるもの「山のきもち－林業が『ほっとする社会』をつくる」（東京農大出版会刊）を出版して（山本 悟）…P.16
「日本の森列伝　自然と人が織りなす物語」（山と渓谷社刊）を出版して（米倉 久邦）……P.17
山本、米倉両氏の本を読んで（古川 興一）……P.18
林業の成長産業化と森林吸収源対策が目玉（上松 寛茂）……P.20

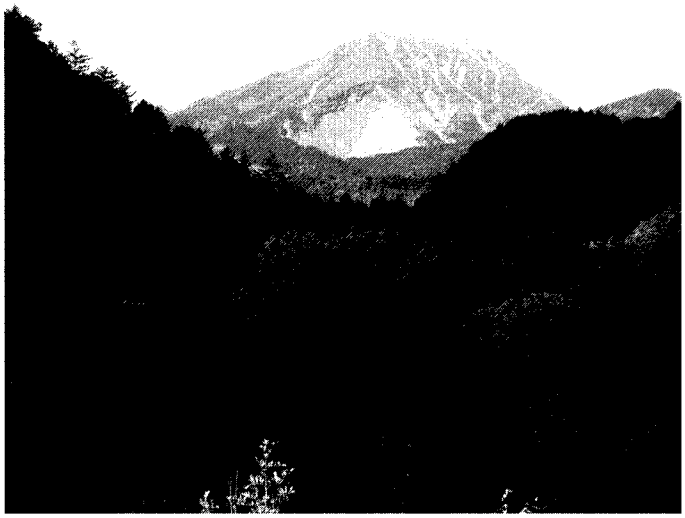
記者の目

三大美林・魚梁瀬杉の馬路村－ピンチをチャンスに（杉本 哲也）……P.19

木曽谷・御嶽山共同取材

2016年10月25日（火）～26日（水）

日本林政ジャーナリストの会は2016年10月25、26日の両日、懸案の木曽谷・御嶽山の共同取材を行った。日本3代美林の一つ木曽ヒノキの産地である木曽谷の森林事情とともに、2014年の御嶽山噴火の犠牲者の冥福を祈り、さらには30年前の長野西部地震などの災害復旧状況を取材するためだ。取材にあたっては、2日間にわたって同行していただいた林野庁の間島重道広報官をはじめ、多忙の中、現地を丁寧に案内していただいた中部森林管理局の新津清亮・木曽森林管理署長、梅田英孝・治山グループ総括治山技術官ら多くの方にお世話になった。心から感謝します。



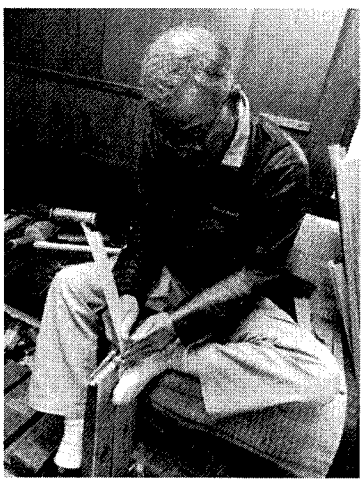
治山・緑化事業の大切さを痛感

日本林政ジャーナリストの会・会長　上松 寛茂

日本の木造建築の主流はヒノキ。中でも木曽ヒノキはヒノキの“王様”。その故郷の中心地は長野県・上松（あげまつ）町。森林・林業取材を永年のライフワークとし、筆者の苗字が上松（うえまつと読む）とあって、いつかは訪ねてみたいあこがれの地だった。

実は2年前、日本林政ジャーナリストの会はこの地の共同取材を計画、会員への案内状を投函する前日に、御嶽山が噴火、死者行方不明者63人を出す大惨事となり、急きょ、取材計画を白紙に戻したという経緯があった。2年の歳月を経て、復興状況はどうなっているのかなどに関心が集まり、今回の現地取材となった。

年間12万人も訪れるという上松町の南西部に広がる赤沢自然休養林には、樹齢300年以上の天然木曽ヒノキが林立、名物の赤沢森林鉄道に乗って日本で初めて森林セラピー基地に指定された森林浴コースを歩きたかったが、既にオフシーズンに入り、日程調整の関係などもあって残念ながら断念。上松町の小林へぎ板店を訪ね、へぎ板づくりのスゴ技に見とれた。



へぎ板を割く小林 鶴三さん

へぎ板とは未乾燥の木材を木の繊維を壊さず、削らず、手作業で薄く割った厚さ1㎜前後の紙のような板のことで、これを交互に編んで細工した網代細工は戦国時代から茶室などの天井や衝立、屏風などの室内装飾に用いられてきた伝統工芸で、熟練の技が要求される。

同店は先代から80年近くへぎ板を製造、2代目経営者の小林鶴三（つるみ）さん（70）は全国でただ一人のへぎ板職人。「へぎ板は木曽の天然五木のねずこ（黒部）でしかできない。天然木は絶滅種に近く、やがてなくなる運命。後継者づくりは無理だ」と寂しそうな笑いを見せた。材料は木曽森林管理署が国有林から切り出した天然木のねずこを木曽木材工業協同組合を通じて供給してくれているという。

足先で板を固定し、最初だけ小刀で板に筋を入れ、あとは両手でするすると割いていく。厚さ5㎝の板から32枚ものへぎ板が取れる。一見簡単なように見えるが実はとんでもない。実際に体験してみた。気持ち良く板が割けるのは最初だけ。いつの間にか折れてしまう。

木曽ヒノキとは、長野県木曽谷、岐阜県裏木曽を中心とした国有林の樹齢150年生以上の天然ヒノキをいい、全蓄積量は約380万㎥で、その大半は保護地

天然木曽ヒノキを売買する土場

御嶽山を背景に林J取材メンバー

域。伐採可能な蓄積量は3割程度、このため、木曽ヒノキの供給を永続的に行えるよう伐採量を漸減してきているという。5年毎で1997～2001年が2万6,000㎥、2012～2016年が6,000㎥で、2017～2021年は5,000㎥へと漸減させる方向だ。天然秋田スギも2012年度をもって供給を終了している。残された貴重な木材資源は大切に大切に後世に引き継いでほしいものだ。

木曽森林管理署・南木曽支署では、2013年度から国有林野から生産される林齢80年生以上の高齢級人工林ヒノキについては良質な素材を「『高』『国』木曽ヒノキ」にそれぞれ丸で囲んで（マルコウ、マルコク、キソヒノキ）の呼称で販売しているという。

木曽谷の国有林で生産される天然木曽ヒノキやカラマツ丸太、高齢級人工林ヒノキの原木を中部森林管理局が民間に委託材して販売する木曽官材市売協同組合荻原事業所を見学した。

だだっ広い土場に積み上げられた長さ4m、径球50㎝にも及ぶ200～300年生の天然木曽ヒノキの丸太がゴロゴロ。壮観な風景だ。関東や関西を中心に全国各地から木材業者が1本50万円から100万円もする丸太を落札していくという。毎月1回、入札方式による市売りが行われている。

この後、訪れた同県木曽郡南木曽町の勝野木材では、立木伐採から搬出、製材・乾燥・仕上げ加工まで社内生産一貫体制を採っている。「製材ラインをコンピューター制御化することで製材時間が短縮でき、従来20～30人かかった人員を2、3人にまで減らせた。人件費のコストダウンに加え、市場や問屋を通さず、消費者との直接取引で中間マージンなしのコストダウンを実現させた」と勝野智明代表取締役は胸を張った。

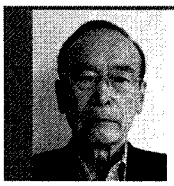
この日は小説「夜明け前」に登場する島崎藤村ゆかりの瀧旅館（同県木曽郡王滝村）に宿泊。翌朝、林野庁王滝治山事業所の案内で御嶽山の治山事業を見た。

2年前の2014年9月27日正午前の御嶽山の大噴火は日本における戦後最悪の火山災害となった。登山道の入り口、7合目の田の原天然公園からの眺望は雄大だ。雲一つない青空に頂上から9合目にかけて二ノ池本館と石室山荘の2軒の山小舎がくっきりと痛々しく見えた。現在の噴火警戒レベルは2（火口周辺規制）。夏山シーズンは9合目までの登山は可能だ。

その前の1984年（昭和59年）9月14日午前8時48分、王滝村を震源とするマグニチュード6.8の長野県西部地震で起きた御嶽山南斜面の大崩壊（御岳崩れ）は3,600万㎥（ナゴヤドーム29杯分）の土石流による土砂が溜まり、濁沢の荒廃地は600ha（皇居敷地の5.2倍）にも及んだ。こちらの方が山地崩壊はより深刻な様相を示している。

田の原天然公園の反対側の災害地の濁沢に移動。濁川と倉本湯川のそれぞれ復旧治山工事の「コンクリート谷止工」を見学した。濁川に流されてきた土砂は赤く染まっていた。

現在、荒廃地の濁沢本流にコンクリートの治山ダムを配置し、両岸の凹凸地形にカラマツ丸太を使用した床固工や土留工、水路工などの工法による工事で、荒廃地に森林が蘇りつつある。長い歳月と巨額な費用を必要とする営々とした治山・緑化事業の大切さを痛感した共同取材の旅だった。



灰色の無法地帯に蘇る緑の自然

日本林政ジャーナリストの会・会員　今藤 洋海

平成10年に小澤さんの森林塾で訪れて以来の18年ぶりの木曽旅行でした。

当時は長野営林局、上松営林署にお世話になりました。翌年の国有林改革で組織の統廃合が行われ、今回は中部森林管理局、木曽森林管理署から説明を受けました。

森林塾で訪れたのは上松営林署の木材販売所でした。檜の伐採量は減ったとはいえまだ現在の数倍の伐採が行われており、貯木場の丸太の山を見て量の多さに驚かされたのを思い出します。当時販売は営林署の直売方式でしたが、平成13年8月から 木曽谷国有林で生産される天然木曽ヒノキに代表される木曽五木をはじめ、人工林ヒノキ等木曽材の販売は中部森林管理局が民間に業務委託して毎月1回入札方式による市売を行なっています。これまでの公売に代わる国有林土場等活用委託市です。

天然木曽ヒノキの伐採量は、平成9年から5年平均で2万6,000㎥が平成24年から5年平均では6,000㎥へと、さらにこれからも減らす方針との説明がありました。天然木曽ヒノキは正に天然記念物になります。

㊞㊞木曽ひのき

天然木曽ヒノキに代わって人工林ヒノキ特に林齢80年以上の高齢級人工林ヒノキについて、平成25年度から㊞㊞木曽ひのきとして極印を押して販売しそのブランド化に努めている。平成27年度の木曽森林管理署の㊞㊞木曽ひのきの販売実績を見ると量的にはまだ多くはないが販売単価は㎥8万円と普通の人工林ヒノキに比べて2～3倍の値段となっている。

木曽谷の80年生以上の高齢級人工林ヒノキは約8,000ha約247万㎥の蓄積があり、それを上回る79年生以下の人工林が控えている。ポスト天然木曽ヒノキとして大いに期待される。

南木曽で見学した勝野木材では、省力化・合理化された社内一貫生産で、品質管理とコストダウンを図り、例えば特殊な乾燥方法により「背割りなし」の木曽ひのき無垢材など良い品質の木曽檜を、幅広く提供できるようになったという。

カラマツ民国連携

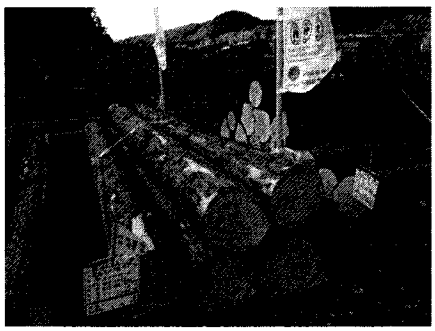
勝野木材では唐松も見た。飴色のひときわ目を引く製品は木曽ヒノキの白とは対照的な魅力がある。乾燥など企業秘密とのことだが板だけではなく梁なども生産している。私の広島の田舎では家を作るのは松だった。近年住宅に使う国産材の比率が高まっているが柱や特に横架材での国産比率は極めて低い。木曽にはカラマツの資源が豊富にある。梁、桁等の部材にぜひ使ってもらいたい。日程の関係で今回はカラマツの民有林と国有林の連携の現場はあまり見なかったが、機会があれば訪ねたい。

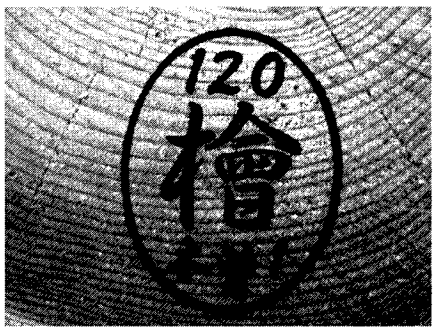
御嶽山の治山事業

島崎藤村ゆかりの滝旅館に泊まり、二日目は王滝治山事業所のご案内で御嶽山の治山事業を見た。

御嶽山は昭和59年（1984年）の長野県西部地震

入札される木曽ヒノキが並ぶ土場





極印された天然木曽ヒノキ

大笹特定流域総合治山工事

で山体が崩壊し多数の犠牲者と家屋の倒壊をだした。南斜面の御嶽崩れで下流の国有林600haが荒廃した。崩壊土砂は3,600万㎥、10㎞下流の王滝川まで10分で到達したという。

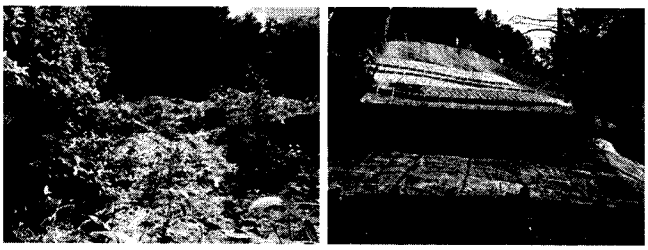
7合目の田の原に登る途中の車窓からは唐松の紅葉が真っ盛りで、遠く木曽駒ケ岳が望まれる絶景が楽しめた。田の原から山頂を遥拝し、御嶽崩れの跡や平成26年の大噴火の様相を目視した。

長野県西部地震により山の上部は山体が崩れ谷間は浸食され、その下流の濁沢川は岩屑流・山津波に流され埋まり、木々は根こそぎ吹き飛んでしまい約10㎞の巨竜ナーガのような灰色の無法地帯が出来た。復旧作業は上部の急斜面には航空実播をし、下のほうは河道に150か所ほどの谷止工を設置し平面には丸太を使い土砂の落ち着くのを待って、30年をかけて少しずつ木を植えていった。植栽では穴を掘って客土などもした。荒廃地600haのうち約300haの適地に緑の自然が蘇ってきた。まことに息の長い営々とした人為が天災をよく克服し、為せば成る歴史を見る思いがした。

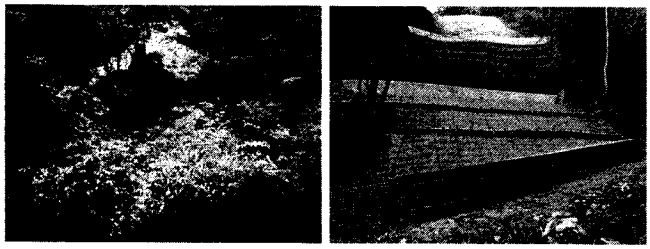
復旧に当たっては、治山事業は元の自然に戻すことを目標とするから自然に同化する木材を使い木枠に土石を積んで行われている。狭い山奥まで作業道を作り資材を運び今もなお続けられている工事に危険の中たずさわれてこられた多くの人々の努力に頭が下がる。

また国民の森、未来世紀の森など国民参加の森づくりが行われ、また流出土を活用した各種のスポーツ施設なども見学した。いずれも多くの人々に愛用されて、治山事業の認識を深めるためにも役立っている。

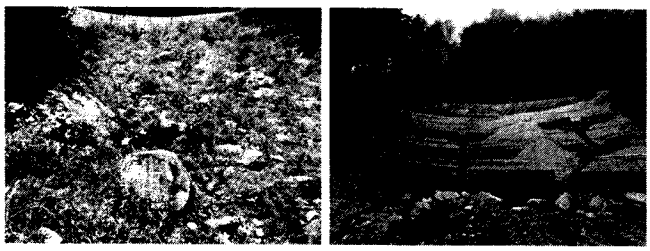
濁沢川のチェックポイント洗い越しで手にした先の



小木曽5（中ノ小屋沢）復旧治山工事　第1号崩壊地（左は着手前、右は完成）



小木曽5（中ノ小屋沢）復旧治山工事　第5号崩壊地（左は着手前、右は完成）



小木曽5（中ノ小屋沢）復旧治山工事　第6号崩壊地（左は着手前、右は完成）

大噴火の土石流堆積の石は意外に軽い石だった。施工中の第64号コンクリート谷止工は丸太を利用した残存型枠工法の大規模なものだった。なお新方式の角材に鉄心を通したパネル工法の型枠を使った大規模な木製枠谷止工の事例もあるという。

印象に残るこの日の御嶽山を漢詩に作ってみた。

深秋木曽御嶽山

唐松紅葉顕純林　碧落白煙秋色深
地震墳岩嶽崩壊　今観埋沢復清森

今回の取材旅行で訪ねた小林へぎ店では名人の技を拝見しながら、へぎ作りにチャレンジしたが、ものの10㎝にも足らず折れてしまった。貴重なへぎ作りの技術と製品が伝承されることを願います。

二日間の短い取材でしたが、木曽林業の新展開、治山事業の役割の一端に触れることができて充実した旅でした。ご案内説明いただいた皆様にはありがとうございました。

名物の手打ちそばは食したが、すんきの時季にはまだ少し早かったのが心残りです。

木曽谷紀行 I

日本林政ジャーナリストの会・幹事　古川 興一

いざ木曽ヒノキを学ばん…と

日本林政ジャーナリストの会が年に1回、実施している現場取材は今年は「木曽路はすべて山の中である」と島崎藤村が小説“夜明け前”で描いた“木曽”をターゲットにした。日本3大美林の一つ“木曽ヒノキ”の産地の名声に惑わされたことに加え、2年前の木曽御嶽山噴火のその後を目の当たりにでも確認してみたかった。

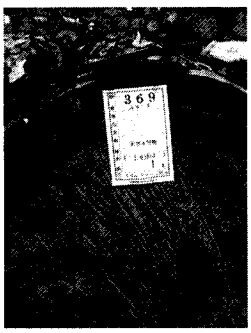
森林・林業関係者にとって木曽の森林はいわば聖地である。銘木の最高峰、木曽ヒノキを擁する日本が誇る森林であり、130年を超える大径木の最大の供給地でもあるからだ。江戸時代、木曽五木と呼ばれる木曽ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ、コウヤマキを無許可伐採した者は手打ちにされたというほど大切にされた貴重な木材資源の山でもあった。20年に一度の伊勢神宮の式年遷宮もここ木曽谷からの木曽ヒノキの大径木あればこそだ。伊勢神宮ばかりではない。全国の寺社仏閣からの大径木需要も多く、木曽谷の存在感は高まるいっぽうなのだ。だからこそ「文化財的な価値の高い建築物への木曽ヒノキの安定供給のために木曽ヒノキ文化財等大径材択伐生産群を設定しています。」と、林野庁中部森林管理局の新津清亮・木曽森林管理署長は木曽ヒノキを箱入り娘のように愛しく話す。

もっとも木曽ヒノキと一口に言うが、実は明確な定義がある。何でもかんでも木曽で伐れるから木曽ヒノキと呼ぶのではない。自分も知らず仲間からも不勉強の身を笑われたが、正しくは木曽谷を中心とした国有林の樹齢150年以上の天然ヒノキのことを指すのだ。確かにそんじょそこらの若造とは年季がちがう。そこには最高級ブランドの誇りが滲む。では、この木曽ヒノキは一体どのくらいあるのか。木曽森林管理署によると蓄積量は約380万㎥。ただ、その大半は保護地域にあり、実際に伐採可能なのは3割程度の115万㎥ほどにすぎない。そうやたらに伐採するわけにはいかない。「大事に、大事に伐採していかなければならない」（前同・新津氏）とまさに箱入り娘のような扱い。年々伐採量を減らしてきており、「平成10年頃までは年間2万6,000㎥だったのがいまは6,000㎥までに斬減、これからはさらに5,000㎥ぐらいまで減らす」（新津氏）という。それもこれも伝統文化財的建築への需要に永続的に対応するためにほかならない。ちなみに現在の伐採量でも実際に“木曽にヒノキ”の名を冠して市場で販売できるのはそのうちの10～20%

御嶽山

御嶽山登山口

木曽官財市売土場



入札される天然木曽ヒノキ

程度でしかない。木曽ヒノキはまさにダイヤモンドのようなものなのだ。

こうなると木曽ヒノキなんて高嶺の花の存在。ところがであり、ここに救世主が現れる。人工林から伐れるヒノキだ。天然林からのヒノキが保護的な色彩を帯びる一方で、明治時代以降に植栽された人工のヒノキ林がいま大きく育ってきているのだ。木曽谷の国有林野のうち面積で天然林は55%、人工林は45%で、人工林のなかのヒノキ林の割合は67%を占める。しかもこのうち、80年生以上の高齢級ヒノキは約30%（247万㎥）も存在する。しかも今後70%を占める79年生以下の人工林ヒノキが順次生育し、高齢級ヒノキの蓄積量が着実にふえる見込みだ。これを市場にのせていこうというわけだ。人工林ヒノキだからといって品質に問題があるわけではない。年輪が緻密で狂いが少なく、淡黄清楚な色合いは上品で香気に富む。「天然ヒノキに代わるブランドとして平成25年度から生産、販売を始めた」。販売に際しては、林齢80年生以上の高齢級人工林ヒノキについて「高、国（マルコウ、マルコク）木曽ヒノキ」の名をつけ、同時に丸太の木口に“80檜、100檜、120檜”という林齢が分かる極印を押した。ここでも木曽ヒノキのブランド化を意識していることがわかる。それは木曽谷の森林関係者のプライドでもあるのだろう。

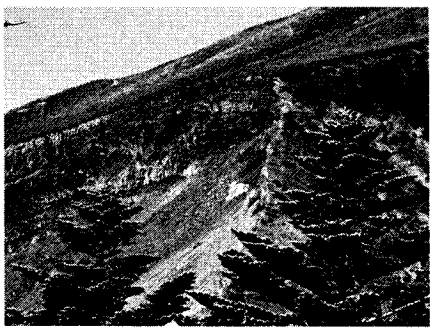
もとより木曽地方の森林資源はヒノキだけではなく、良質なスギ、カラマツなども豊富。とくにカラマツは90年生の高齢級材が生産されていることもあって、高値での期待をふくらませる。「多彩な木材を安定的に生産、供給していきたい。現在、木曽郡の木材生産量は7万㎥程度だが、これを10万㎥にはふやしたい」（新津氏）と国有林の経営の拡大を狙う。

御嶽山噴火で治山チームの底力を見せる

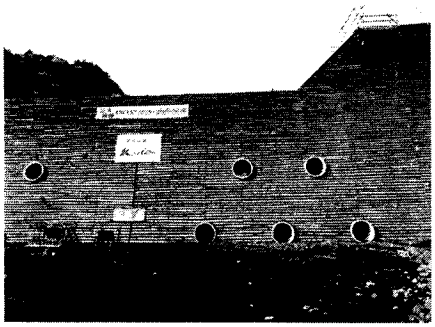
こうした木曽ヒノキをはじめとする美林を誇る一方で、木曽谷は急傾斜地が多く、常に土砂流出・崩壊の危険にさらされている。木曽谷の歴史は災害の歴史でもある。1984年にはM 6.8の長野西部地震が発生、死者・行方不明者29人、家屋損壊604戸の大災害となり、国有林も御嶽山南斜面が大崩壊（御岳崩れ）し、ナゴヤドーム21個分に相当する土砂が流出、下流の国有林600haを荒廃させてしまった。以来、木曽森林管理署は同地震の災害復旧に取り組む30年間だった。治山ダムなどを建設し、

一方で山の復元を目指し緑化工事にも取り組んだ。その緑化工事は荒廃面積の約半分にあたる290haにおよんだ。いま荒廃地の多くが森林によみがえりつつある。土砂の処理場として埋め立てられた跡地にはスポーツ公園がつくられ、人々の憩いの場として森林鉄道イベントなども開かれる。土石流でせき止められてできた自然湖ではカヌー遊びも楽しめる。災害をいわば逆手にとったかたちだ。

そんな30年前の災害の記憶が薄れかけた矢先に発生したのが2014年9月27日の御嶽山の噴火だ。死者・行方不明者63人という戦後最悪の大惨事となった。自衛隊、警察などによる登山者捜索や人命救助の模様はＴＶなどで放映され記憶に生々しいが、木曽管理署を中心とする中部森林管理局の対応は速かった。降灰・噴石による森林災害や山地災害の調査をただちに実施するとともに二次災害防止対策として土石流の危険性がある濁沢川に監視カメラ、土石流センサーを設置し、さらに濁川の治山ダムの緊急的な除石工事にも着手した。「自衛隊などのように人命救助の先頭に


御嶽崩れ

濁川復旧治山工事

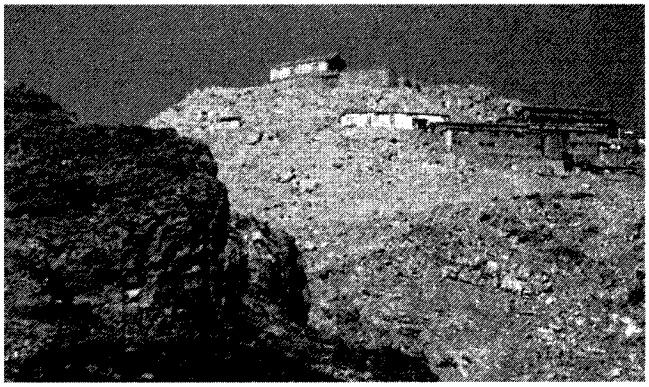

治山ダム

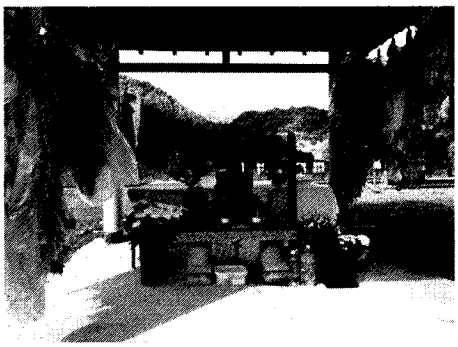
は立てないもどかしさはあったが、山の地理的情報や降灰・噴石情報など政府対策本部のお役にはたったと思う」と、いわば人命救命の後方支援としての修羅場のような当時の状況を思い起こすのは木曽森林管理署治山グループの梅田英孝・総括治山技術官だ。「治山という使命感のもと現地調査に出掛けた職員たちが無事に帰ってきてくれるか顔を見るまで気が気ではなかった」とも。

既存の治山ダムの除石工事は噴火により堆積した火山灰を含んだ土石流の流出対策としても緊急的に実施したものだが、噴火後の10月中旬には台風18号、同19号が襲来、降雨による上流からの土石流出をストップさせる4万㎥におよぶ土砂のポケット効果を確認したという。迅速な対応は長野西部地震などが教訓になっていたことは間違いないだろう。

いま、御嶽山噴火にともなう本格的な土石流対策工事も新たな治山ダム（コンクリート谷止工）の建設などで進められている。施行中のダムは、コンクリート打設の型わくが一般的な金属製ではなく、カラマツの間伐材だ。さすが林野庁のダムと感心。見た目にも美しく、国有林の中の治山ダムにふさわしい工法だ。

美しい木曽ヒノキの森林も、ダイヤモンドのような


降灰が積もる御嶽山の山頂付近


御嶽山噴火犠牲者慰霊碑

貴重な天然木曽ヒノキの生産も、こうした治山という地味な努力の積み重ねがあればこそと、改めて思いを新たにした木曽谷の取材だった。木のこと、森林のこと、知らないことの多さを思い知らされた。木曽路の森の奥は本当に深い―。

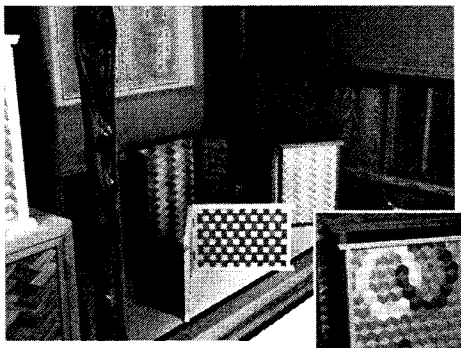
木曽谷紀行Ⅱ

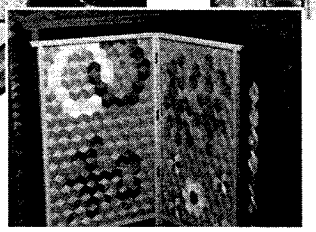
木曽の木と寄り添う人々

木曽谷の取材では木曽の木と寄り添う人たちとも出会った。木曽の森林からの木をまるで唯一無二のように溺愛する人たちだ。

「木曽の天然木が入手できなくなったら廃業ですよ」と、真顔で話すのは木曽で先代から80年近く“ヘギ板”を製造している小林鶴三さん（小林ヘギ板店代表）だ。ヘギ板といってどれだけの人が知っているのだろうか。ヘギ板とは木の繊維を壊さずに、削るのではなく、手で割って、厚さ1㎜以下まで薄くした板のことだ。木槌と小割なたで木材に切れ込みを入れながら手を使い、足を使って切りさいていく様子は、まさに職人芸であり、できあがった極薄のヘギ板を手にしたときは名人芸とタメ息さえ出た。感嘆したのは薄さだけではない。美しいツヤと模様もだ。刃物などで木の繊維を削らないので、木目が浮き出てツヤが良いのだという。しかも、年が経つにつれていっそうツヤが出て、美しさを増すとも。では、このヘギ板はどう使われるのか。代表は網代天井。茶室や和室の天井で見かけることが多く、ここでようやく、あの編まれた網代天井はヘギ板だったのかと思い当たることになる。網代の編み方は市松、矢羽根などいくつもあるが、天井だけでなく、タンス、屏風、衝立などいろいろな室内装飾に使われる。

このヘギ板づくりを可能にしているのが木曽谷の天然木なのだ。「ネズコ（黒部）、樹齢数百年の目のつまった天然木のネズコ（黒部）でしかヘギ板はつくれません。年輪の間隔が広いと板目の模様が出ないのです」。当然ながらそう簡単に入手できるわけではない。小林


へぎ板作品


へぎ屏風

へぎ板づくり

さんの父親も大阪で修行したが、良材が手に入りにくくなり、昭和の初めに材木を求めて木曽に来て独立した。天然木の調達は今も決して好転したわけではなく、むしろ厳しくなるいっぽう。ヘギ板職人も木曽地方で小林さん1人だけ。「私の代で終わりでしょうか」と冗談めかすが、後継者もおらず、木材の調達も難しいなか、小林さんが「絶滅危惧種ですかね」と自嘲気味に話すのもあながち冗談と笑い飛ばせない。林野庁木曽管理署の新津署長が「小林さんの分ぐらいは頑張りますから！」と援護射撃をするのだが――。ヘギ板に似た製品に機械で大量生産する突き板あるが、色艶、薄さ、木目などその美しさはヘギ板にとてもかなうものではない。伝統技術をどう伝えていくか。その命運の一端を木曽が握っている。

木曽ヒノキにこだわる家づくり

建築木材として木曽のヒノキにこだわる木材業者もいる。訪れたのが勝野木材。木曽を拠点に50年以上にわたって伐採から製材・乾燥までを一貫して手がける総合林材業者だ。「木曽のヒノキの魅力にとりつかれたら、そう簡単に抜け出せるものではありませんよ」と、まるで惚れた女房をノロけるように破顔一笑するのが社長の勝野智明さん。木曽谷の厳しい自然環境のなかで100年、200年の長い歳月をかけてゆっくり成長するために「1㎝の幅に10年以上の年輪が詰まった、キメ細かく緻密な美しい木材になります。香りがよく加工も容易で狂いも少ない。殺菌効果や炎症を鎮める消炎作用や芳香フィトンチッドの放出など多くの健康効果をもたらしてくれます」「耐久性、強度にすぐれ、耐久性は天然の木曽ヒノキは1,200年、人工材木曽ヒノキは240年ですよ。しかも曲げ、圧縮、引っ張りのいずれの強度も伐採後200年までは増大しつづけます。世界でも指折りの優れた建材ですよ」と、自慢話は尽きない。

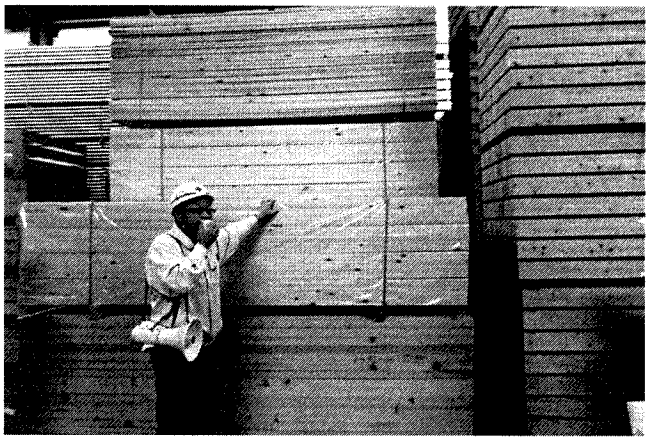
このように惚れこんだ木曽のヒノキだけに、その品質・性能を存分に活かすために製材、乾燥、仕上げ加工の技術開発に取り組む。製材ラインをコンピューター制御化し、従来25～30人かかった人員を2～3人ですむようにし、人件費のコストダウンと品質の維持、管理を徹底。さらに同社のすごいのは、問屋などを通さずに直接、工務店などユーザーと取引きし、中間マージンを排除するという流通ルートの改革も実現したことにある。「最高の建築材料を最高の品質で、できるかぎりリーズナブルな価格で提供する」ためという。

直取引をしている工務店の一社が注文住宅を手がける、もりぞう（東京都渋谷区）で、同社は勝野木材をパートナー会社と位置づけ、国産材の最高峰による「木曽ひのきの家」として事業展開している。同社はこの「木曽ひのきの家」を勝野木材の工場敷地内にモデル住宅として建て、ユーザーに宿泊体験ツアーを実施し、工場で木曽ヒノキの生産工程を見学し、その上で木曽ひのきの家の住み心地、快適さを体感してもらっている。木曽ヒノキの素晴らしさを味わってほしいとの想いにほかならない。まあ、木曽ヒノキを仲人に相思相愛の仲といったところか。見方を変えれば、この木曽ヒノキは樹齢80年生以上、ふんだんに供給されているわけではない。勝野木材が仕入れることができる量は約1万6,000㎥程度。高齢級・国有林ブランドの「マル

高、マル国キソヒノキ」で住宅戸数にして年間250戸分ほどが限度という。やはり希少な超プレミアム建材なのであり、勝野木材がユーザーとの直取引を実現しているのも、裏を返せば入手量の制約があるからともいえよう。同社は、造林、育林事業にも力を入れ、「循環型木材利用をめざしている」としており、「木曽谷の森林、そして木曽ヒノキを守りつづけていきたい」と、力を込める。

振り返ってみれば、木曽ヒノキは青森のヒバ、秋田のスギと並ぶ日本3大美林。豊臣秀吉が大阪城築城などで木曽谷の本格的な開発に乗り出したのが始まりとされ、江戸時代には尾張藩の直轄領となり、さまざまな保護と規制が行われた。一切の立ち入りを禁止する“留山”とされ、「木一本、首一つ」という厳しいふれを出し、ヒノキをはじめとする木曽5木を守った。明治になると木曽の山々はほとんどが「御料林」と呼ばれる皇室の財産となり、そして今、国有林としての管理が行われている、という歩みをたどっている。その甲斐あっての今日の木曽ヒノキが蘇る山々なのだ。木曽の森林と寄り添う人たちはだからこそ誰もが木曽ヒノキを愛し、守りつづける気概を見せるのだろう。

日本書紀に「杉と楠は舟に、ひのきは瑞宮（宮殿）に、


勝野木材・勝野社長

槇は棺にすべし」と記されている。落語にも普請祝いの口上に「ご普請は総体ひのきづくり、畳は備後の五分縁りで…」云々の家褒めのくだりがある。ヒノキは古来、最高級住宅建材の代名詞なのだ。そして晴れの舞台はヒノキ舞台だ。

だだ、帰りがけ、勝野さんの言葉が突き刺ささった。「設計者や工務店の方がよくいらっしゃいますが、木のことを知っている人が本当に少ない。樹種の違いも分からない。木曽五木の見分けなんて無理です」。国産材の利活用が叫ばれる。だが、確かに肝心の木を知らなくて何が利活用かだろう。木造住宅の復権も、基礎（木曽？）となる木の知識からということか。

御嶽山噴火で治山ダム浚渫を決断した名もなき男たちの栄誉に想う

日本林政ジャーナリストの会・監事　**篠原 宏**

林政ジャーナリストの会では、平成28年10月25日、26日に、長野県御嶽山周辺の森林・林業・林産業について共同取材を行った。実は26年秋に計画されていたものだが、御嶽山噴火が発生したため、中止になったものである。

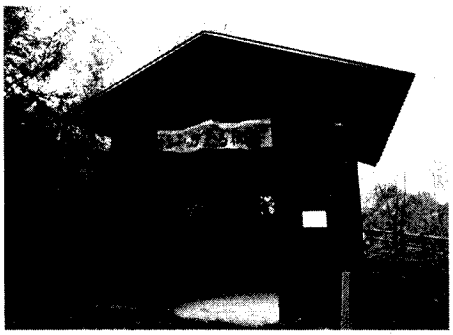
自分自身は昭和59年秋に、林野庁の友人たちと御岳山国有林の見学を行ったが、その後、御岳を訪れる機会がなく、長野西部地震後の状況についても視察したいと考えていた。

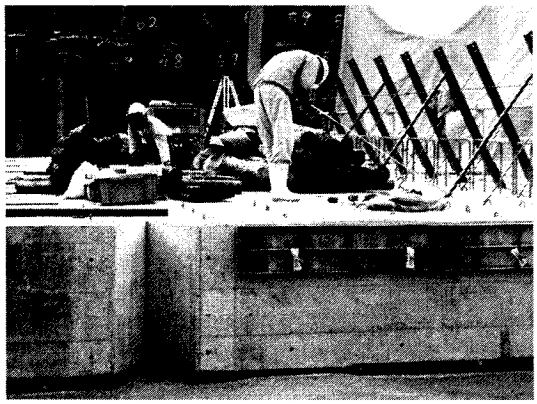
今回の視察の具体的中身については同行した諸先輩のレポートに譲り、本稿では篠原の個人的な感想を報告する。

御嶽山治山に想う

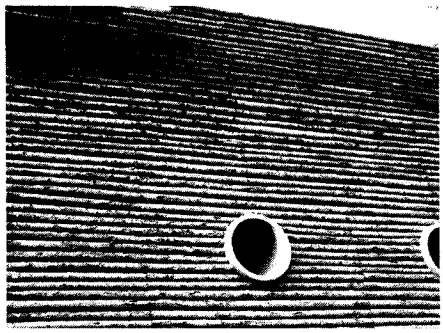
昭和59年の長野県西部地震が発生した時、篠原は長野県に隣接する愛知県稲武町役場に勤務していた。地震発生時刻は昼頃と思っていたが、実際には朝の9時前だと知り、人間の記憶の不確かさを思い知った。愛知県でも、ものすごい揺れであり、この地震の復旧工事のため、愛知県で使用する予定であった工事資材も、急遽、長野県に回され、役場が発注していた林道工事がストップする事態となったことを思い出した。

この地震により、山麓で大崩壊が発生し、大量の土砂で沢が埋まったということは当時のニュースで知っていたが、崩壊地の土砂は、なぜか途中で尾根を越え、隣の沢に流れたということを、今回現地を訪れて初めて知った。土砂がそのまま下流に流れれば、直下


土石流等監視所


ダム工事現場

土石流が生々しい


治山ダムの間伐材による型枠

の集落を直撃し、さらに大きな大惨事になるところであった。御嶽山の神様が人々を守って下さったのだろうか？

長野西部地震の後、長野営林局・中部森林管理局では、御岳周辺の災害復旧事業を推進してきた。治山ダム：137基、護岸工：7,743 m、山腹工：310ha、保安林管理道：3,800 mが施工されるとともに、木曽川下流の都市部住民も参加して、ボランティアで植樹等を行う「未来世紀につなぐ緑のバトン」事業が開催され、御岳の土石流跡は、緑が甦ってきた。

こうした中、平成26年9月27日、御嶽山が噴火し、登山客ら58名が死亡するという我が国における戦後最悪の火山災害が発生した。この非常事態に当たり、中部森林管理署、木曽森林管理署等のチームは、被災状況の確認、監視カメラ・雨量計の設置、治山ダムの設置・補修を行うなど、二次災害の防止や地域住民の安全・安心の確保に努めた。

特に驚くべきことは、既に堆砂している治山ダムの浚渫を実行したことである。治山ダムは、本来、土砂を堆砂させることにより安定勾配を作り、河川の流れを緩やかにすることが目的であることから、浚渫することは基本的にあり得ない。

しかし、御嶽山噴火の大量の火山灰が、雨により流されてくる恐れがあるが、新たな治山ダムを造るには時間的余裕はないことから、既設治山ダムの浚渫を決断したのである。しかし、火山灰により重機のエンジンがぶっ壊れる恐れがあるとともに、作業中に火山灰を含む大量の土砂が流れてくるかもしれない、まさに命がけの作業である。この危険な作業を引き受けてくれる業者がなかなか見つからなかったのも当然である。

岐阜に引き受けてくれる業者がやっと見つかり、この決死のプロジェクトは実行された。正に「プロジェクトX」を地で行く男たちの勇気と実行力に感銘を受け、このことを多くの国民に伝えなければならないと深く思ったところである。

エピローグ
人事院総裁賞を受賞

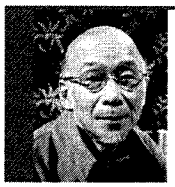
人事院総裁賞は、多年にわたる不断の努力や国民生活の向上への顕著な功績等により、公務の信頼を高めることに寄与したと認められる職員又は職域を顕彰するものである。これまで、林野庁関係では、足尾治山関係、襟裳緑化関係、釧路パイロットフォレスト関係

が受賞している。

平成29年2月2日、平成28年度の人事院総裁賞が発表され、中部森林管理局、木曽森林管理署、南木曽支所のグループが受賞した。今回の受賞は、下流の人々を守るために命がけで自然と闘った名もなき男たちの栄誉である。林政ジャーナリストの会は、直前に取材を行っており、今回の受賞が当然のことと理解できる。

森林・林業関係の業務は、人目につかない山奥での地道な仕事であり、なかなか国民に知ってもらう機会が少ない。森林・林業・木材産業の中には、このような「プロジェクトX」がまだまだ多いと思われる。

こうした隠れた「プロジェクトX」を一般の人々に紹介していくのが、我々、「林政ジャーナリストの会」の使命の一つではないだろうか？



木曽ヒノキを競る巨木並ぶ土場は圧巻 台湾の阿里山への想いも――

日本林政ジャーナリストの会・幹事 海老澤 秀夫

木曽の森林管理署管内を訪問できたのは、とても良い経験だった。木曽と言えば何と言っても天然の木曽ヒノキ。木曽官材市売協同組合「薮原事業所」は特に印象に残った。何せ、土場に巨木がずらりと並んでいる。直径1mの木曽ヒノキ原木。競りが終わったばかりで「1㎥100万円超」という単価を聞いてびっくりした。何に使うのだろう。これで木材ビジネスとして経済的にペイするのか、搬出はヘリコプター。3t以上もある木を吊り上げて運び出すのだという。このあたりの経済的な仕組みに疎い私には分からなかったけれど、天然性のヒノキが希少な材になっていることだけは理解できた。

天然ヒノキの分布は福島県から九州に及ぶが、優良材の分布の中心は木曽地方。だから、木曽ヒノキは古くから伐って、伐って使われてきた歴史がある。三大美林のひとつになっているくらいだから、「木曽ヒノキ」ブランドは歴史が古い。いくらお金を払っても使いたい、という需要があった。

今回お世話になった木曽森林管理署の方の説明によると、「木曽ヒノキ」と呼ぶことが許されているのは「樹齢150年以上の天然ヒノキ」とのこと。そうした木曽ヒノキは減る一方で、多くの山が保護林になっている。最大限伐採できるとしても、全蓄積量約380万㎥のうちの3割程度らしい。平成24年から28年までの5年間に、実際に伐採したのは6㎥。29年以降は年1㎥に減らす計画だという。供給先も、最終的には伊勢神宮など、どうしても必要な社寺へ限定されていくようだ。

実は、木曽の森林管理署管内を訪問する少し前に、たまたま台湾の阿里山に行く機会があった。戦前の日

本の統治時代、タイワンヒノキやタイワンベニヒノキなど膨大な量の大径木が森林鉄道で運び出された山だ。戦後もしばらくのあいだ、日本で得にくくなってしまったヒノキ大径木の代替材などのために輸出されていた。もちろん現在は伐採が禁止され、阿里山の現地は「森林レクリエーション区」として国の経営の下に置かれている。

阿里山一帯の伐採跡地と思われる場所には、なぜか日本のスギを使った植林地が広がっていた（台湾では日本のスギを「柳杉」と呼んでいる）。お世辞にも良い山ではなかった。「日本のスギは台湾では生長が早すぎて造林木としては失敗でした」と現地を案内してくれた研究者も言っていた。それに、台湾はある意味「林業、林産業を諦めた国」のようだ。そのことを台湾林務局の関係者に問うと、「木材の自給率は１％未満。2017年からは３％を目指して動き出そうとしてはいるのですが…」と自信のない返事が返ってきた。もしかしたら、台湾の林業がここまで縮小してしまった背景の一部には、日本の統治時代から高度経済成長時代にかけてのヒノキの「略奪」があったのではなかったか。台湾の阿里山を見て、日本の木曽を訪れて、優良材であるがゆえのヒノキの持続的ではなない伐採と利用と枯渇の歴史を思った。

巨木林を育てたいの思いも――

数百年も千年も木を育てるというのは、人の個人の時間をはるかに越えている。

現在、戦後に植えた40年、50年の人工林の活用が大きな課題になっているが、それでも木曽ヒノキの話を聞いて、人の意志でせめて100年、200年の木を育てるのも意味があるのではないかと思った。巨木林を育てたい。ふと、そんな思いが頭をよぎった。

私が暮らす滋賀県高島市朽木地区は、日本でも数少ない天然杉の自生地になっている。秋田杉ほど有名ではないが、山の尾根から中腹にかけて、天然杉が高密度で生えている場所も少なくない。

かつては「天然山」と呼んで、一定の太さになったら抜き切りして販売していたらしい。人が植えなくてもお金になるので「天然山は宝の山」と言われた時代もあったそうだ。周辺の雑木を伐ったりして手入れし、樹齢が100年を越えるものも多かったという。

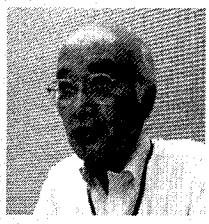
私はいま、市から「５年契約」で150haの山の管理を請け負っているNPOの事務局をやっているが、あと100年は「伐らない」人工林の仕組みがあってもいいのかなと、木曽や台湾のヒノキを見て思っている。

100年後、200年後、その巨木がどんな使われ方をされるのか分からないけれど、ここ100数十年のあいだに失われてしまった巨木林を少しでも補填できるのなら、そんなにワクワクすることはない。でも「5年契約」は、山の時間とくらべたら絶望的に短い。

定例研究会

江戸城天守の再建構想

ＮＰＯ法人・江戸城天守を再建する会・理事、日本林政ジャーナリストの会・会員
土屋 繁



江戸城寛永度天守は、1657年明暦の大火で焼失して以来、今日まで約360年も再建されなかった。この天守は、日本の城郭建築の最高到達点であり、日本文化の最高級の傑作と言われる。

この“幻の江戸城天守”を再建する、それが私たちの夢です。

夢が実現したら、東京都の都市景観は一変し、世界に類のない日本の伝統と文化を代表する、魅力ある国づくりの象徴になると信じます。

たった1枚の「建地割図」が遺された寛永度天守は、日本の木造建築技術の集大成であり、私たちは創建時の伝統的な木造工法で再建しようと運動を進めている。

現在の皇居である江戸城には、華麗な天守があった。天正18年（1590）の家康関東入城後、３代将軍家光に至る数回の工事で完成した。

天守は、慶長度（1607・家康）元和度（1623・秀忠）寛永度（1638・家光）と３度築かれ、中でも家光の「寛永度天守」は、天守の歴史上、高さ、規模とも史上最大で美しい城郭建築だったと言われている。

しかし、残念なことに、それは明暦の大火焼失した後、二度と再建させることはなかった。

首都東京に江戸城の天守を再建することは、わが国が新たに再生し、観光立国として飛躍するための、シンボルに相応しい夢のある事業だと信じます。

天守再建は、クールジャパンで世界を魅了する、新たな日本の文化と技術を発信するシンボルタワーを建設することになる。また、私たちの運動は、「地方創生」の一環とした、各地の「城郭再建」運動への支援にもなると考えます。

再建された江戸城天守の壮麗な姿が、国民の誇りとなることを願って、天守再建運動続けていきます。

昔、江戸は水辺の都市でした。天守の再建は、その水辺の都市を復活させる狙いもあります。日本橋から船に乗って日本橋川を遡り、千代田区役所の辺りで船を下りて、天守で遊んでいただく。船に戻ったら今度は飯田橋辺りから神田川を下り、隅田川に出る。隅田川を遡り、スカイツリーを見る、といった水辺をたどる観光コースも楽しめる。

天守再建運動の目的の一つは、「国の光」をつくることによって、魅力ある国造りを目指す観光立国・日本の国民的シンボルとすることでもあります。

徳川の江戸城は、天正18（1590）年の家康関東入城後、第３代将軍家光に至る数回の工事で完成した。しかし、太田道灌が江戸城を築いてから200年後、明暦1657年の大火で焼失し、現在の皇居東御苑に遺る「天守台」だけは、加賀・前田綱紀により、修築再建されたが、天守は、今日まで再建されることはなかった。

265年続いた徳川幕府で、江戸城に天守が存在したのは、初めの50年に過ぎない。４代将軍家綱を支えた会津藩主・保科正之が、明暦の大火の２年後、「天

守の作事、当分御延引あるべし」と、天守再建に賛成しなかったのだ。

「天守は城の要害に利あるものではなく、ただ遠く観望する迄のことで、（武家町人が大災害で難儀している中で）公儀の作事を長引かせ、国財を費やすべき時節ではない。当分御延引然るべし」。

しかし、新井白石は正徳２（1712）年に、天守再建計画をまとめた。この時の「建地割」図が１枚遺され、この図面が天守再建への根拠となった。江戸幕府の作事方大棟梁・甲良家に伝わる寛永度天守の設計図は、東京都立中央図書館東京誌料文庫に所蔵されている。

寛永度天守は　日本の城郭建築の最高到達点であると同時に、江戸芸術文化の作品の中でも、最高傑作の一つと言われている。この江戸城天守の文化的歴史的価値を再認識し、復元を目指すことで、未来に向け、日本の伝統的な宮大工の技術の継承につなげていくことができる。

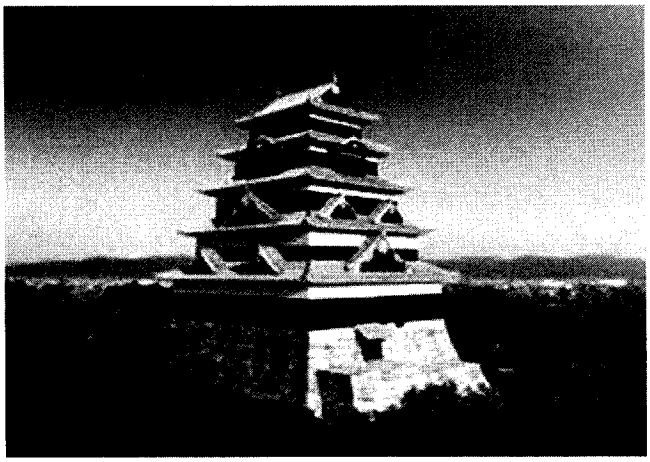
天守再建の一つのカギは、「檜の通し柱」と言われる。中でも天守の２階から３階には、60㎝角、長さ 15m の通し柱が 13 本使われていた。直径 1m、樹齢 500 ～ 1,000 年の檜が必要になるという。

江戸文化の象徴である江戸城天守の復元は、今こそ近未来に向けて、その時を迎えている。

世界の大都市には、ロンドンのバッキンガム宮殿、パリ郊外のベルサイユ宮殿、北京の紫禁城、ニューヨークの自由の女神など、歴史と伝統と文化の象徴というモニュメントがあるが、東京にはそうした記念碑がない。

観光立国を目指す日本の首都東京に、江戸城天守を再建することは、クールジャパンで世界を魅了する新たな日本の文化と技術を発信するためのシンボルタワーを建設することになる。また私たちの江戸城天守を再建する運動は、“地方創生”の一環とした「城郭再建」運動への支援にもなると思います。

私たちＮＰＯ江戸城天守を再建する会は、「天守再建は、日本の伝統的な宮大工の技術の継承でもあり、また森林資源の育成保全でもあり、林業振興でもある」と考え、広島大学大学院の三浦正幸教授の指導を受けてきた。



再建を目指す江戸城天守（寛永度）
提供：NPO 法人・江戸城天守を再建する会

教授は平成 28 年、江戸城天守再建へ向けて、大きなステップとなる「寛永度江戸城天守　復元調査研究報告書」をまとめた。

ＮＰＯは、この報告書をもとに、天守再建を目指している。三浦教授は、「江戸城天守は、伝統的で最先端をいく日本の木造建築技術の集大成」であると、以下のように述べている。

『寛永 15 年（1638）に完成した江戸城天守は、地上５階で高さ約 45 m（総高約 59 m）、法隆寺五重塔よりもはるかに高く、容積では東大寺大仏殿と並んで世界最大の木造建築であった。

強度・耐震性・木肌の美しさで世界一の建材といわれる日本ヒノキを用い、釘や金物を一切使用せずに、木組みだけで柱・梁・桁を接合する、伝統的木造建築技術で建てられていた。

現代建築の鉄筋コンクリート造や鉄骨造は、接合部の変形を許さない剛構造で地震に対抗するが、伝統的木造建築の木組みだけの接合部は、柔構造と呼ばれるもので、巨大な地震エネルギーを、接合部がわずかに動くことによって、小さな摩擦熱に変えて吸収してしまう、夢のような耐震建築である。

世界最大の木造建築・江戸城天守は、現代でも世界をリードする先端技術建築といえる、日本の木造建築技術の集大成である』

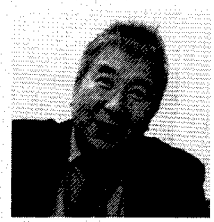
私たちＮＰＯ江戸城天守を再建する会は、日本再生、新しい国造りに向けて、「寛永度江戸城天守再建」を実現させる運動を続けていきます。

定例研究会

ヤマに求められるもの

「山のきもち―森林業が『ほっとする社会』をつくる」(東京農大出版会刊)を出版して

毎日新聞編集委員、日本林政ジャーナリストの会・会員
山本 悟



森林組合に若者が増え、若手だけの林業会社もお目見えした。林業女子会が方々にでき、女性のみの伐採作業班まで登場している。

一方、たった2haの人工林と雑木林での催しに、5,000人ものカップルら若者が殺到する。ヤマが動き出した。

かつては、林業は3K職場の筆頭格と呼ばれ、特に若者から敬遠されてきた。そんな若者たちがいま、なぜヤマを目指すのか。そこが知りたい。

人口減少時代、防災と環境保全の要でもあるヤマをどう守って回すか。いかに豊かに暮らすか。若者を通して、進むべき方向が見えるかも知れない。書き下ろしの本書を執筆する動機だった。

北海道から鹿児島県は屋久島まで、ヤマの現場や街を歩き、20、30歳代に取材し論争もした。

「拡大、成長といった、これまでの大きな幸せは求めていない。人や自然とつながる、小さな幸せをみんなで大事にしたい」。ある女性の言葉が印象的だった。大きな幸せより、小さな幸せの集合体だという。

そこで、見えてきたのは、利便性と効率化を追求してきた文明のほころびとともに、競争の渦の中で大規模化や拡大を志向してきた、これまでの成長経済を支えてきた価値感とはまったく違った価値意識の芽生えだった。

そして、斜陽産業と言われ続けた林業の可能性であり、国際的に誇れる共生型の「里山の知恵」だった。

3部構成の本書は、第1部でバイオマス発電や木造公共建築物の広がりなど、人工林が活用期を迎えたことで木材活用が活発化している現況のほか、再造林放棄や林地境界の未確定問題など課題に迫った。

第2部では、比重で比較した木材の優れた強度や可能性など「森林や木の底力」を紹介した。

特に、柿の実を全部取らずに、冬を越す野鳥のために少し残しておく「木守り」や、クマの出産期だけ、村人が譲って畦道を通らないよう努める「熊の道」の風習など、多様性を尊重し、地域住民が生き物同士、共存を図る「里山の知恵」に焦点を当てた。

「持続性」をテーマにした第3部では、森林をめぐる地球温暖化対策や森林認証などの動向のほか、森林を自然資本として捉えた山村ビジネスや森林のセラピー事業など地域創生の新たな動きを追った。

さらに、押しつけられるのではなく自身の確固たる価値観を、生命の源泉である森林に見出し始めた若者たちの思いを探った。

第1部で紹介したが、単板や挽き板を貼り合わせた合板や集成材、CLT（直交集成板）などエンジニアリングウッドは「小さな幸せの集合体」であり、石膏ボードや鉄など多様な素材と木材を組み合わせた耐火材は、多様性の有効活用だ。

2020年東京五輪の新国立競技場も集成材やCLTを活用し、鉄と木材のハイブリッド建築だという。木材の復権を喜びたい。

価値感の転換で森林が再評価され、都会ではメンタルヘルスや教育、コミュニケーションの分野などで木材に対する新たな需要が生まれている。

さらに、分断、排除、非寛容が覆いつつある世界情勢で、多様性を生かした、共生・循環型の木材活用の知恵が、ますます注目されるのではないだろうか。

定例研究会

「日本の森列伝　自然と人が織りなす物語」（山と渓谷社刊　ヤマケイ新書）を出版して

日本林政ジャーナリストの会・会員
米倉 久邦

日本は森林大国である。国土の３分の２が森林に覆われている。フィンランドトップの座は譲るが、ノルウェーとほぼ肩を並べる。先進国の中でも群を抜く高さだ。しかも、日本列島は南北に長い。南には亜熱帯の樹木が茂る。北上するにつれて暖温帯、冷温帯に移り、北海道では亜寒帯の森にも出会える。雨量にも不足はない。これほど豊かで多様な森林を持つ国は世界に無いといっていい。

もう一つ、日本の森林を特徴づけるのは人との関わりだ。列島に人が棲みついてこの方、森は人々の暮らしを支えてきた。森の恵みを頂き、時に森を破壊し時に森を守った。どの森にも人の痕跡が残る。本の副題に「自然と人の織り成す物語」と付けた所以である。

「多様性」と「人」の視点から、本書は北海道から沖縄まで 12 の森を選び、歩いたルポである。

北海道黒松内・北限のブナの森　函館から約 100 ㎞北にブナの北限がある。氷河期に新潟の南にまで後退していたブナが、温暖化とともに北上を始め北限の地にたどり着いた。津軽海峡を越えるのに 3,000 年がかかった。自ら移動できない樹木がどうやって進んできたのか。ブナの戦略はすごい。

山形県・庄内海岸砂防林　厳冬に北西の季節風が吹き荒れる。烈風が巻き上げた砂は家屋を埋め、田畑を覆う。そのすさまじさは想像を超える。人と砂嵐との闘いは 400 年に及ぶ。植えては枯れる、を繰り返した。海岸には長さ約 33㎞、幅 1.5 － 3㎞のクロマツ海岸林が砂を食い止めている。

福島県・奥会津源流の森　奥会津の山々は偽高山帯。標高は低いが、厳しい自然条件で山頂部に樹木は育たない。まるで高山のような風景になる。際立つのは豪雪だ。雪は雪崩となって独特の地形をつくり、植物は雪崩に耐える特質を持つようになった。一方で雪の下は気温ほぼ０度、雪は厳しい寒さから守ってくれるマントにもなる。自然環境が森の在り様を決定している。

静岡県伊豆半島・天城山塊の森　伊豆半島は太平洋の彼方からフィリピン海プレートにのってやってきた。やがて日本列島にぶつかり、列島の一部になった。壮大な地球のドラマである。その刻印はいまも天城山塊に残り、特異な植生も生んだ。山稜には、太平洋型のブナが茂る。江戸時代の小氷期に根付いたという。

比叡山・延暦寺の森　天台宗の総本山延暦寺の寺領、比叡山の森は日本史の大舞台、京都と近江を分かつ位置にあり、国家権力と宗教に翻弄されてきた。戦乱と権力闘争に明け暮れ再建のために森は伐採された。江戸時代には徳川家の庇護を受け、明治には神仏分離令によって寺領を没収された。

奈良県・春日山原始林　春日大社の背後にある山に広がる森林が春日山原始林である。奇跡の照葉樹林が残る。神の山として不伐の掟があったからだ。しかし、森の様相は変化しつつある。最大の圧力は植物を食べ尽くすシカだ。神鹿降臨に始まる大社ではシカは神の使い。どうするのか、答えが見つからない。

長野県・上高地の森　上高地には太古の森があると思う人は多いだろう。だが、実際には昭和の初期まで約 300 年にも渡る伐採の歴史が秘められている。登山の聖地となる前には、松本藩の財政を支えた林業の地であった。

紀伊半島・大台ケ原の森　有数の多雨地帯が深い森をつくってきた。明治になって大規模な森林伐採が始まり、いまでは観光用のドライブウェーが山頂近くまで伸びている。北方の針葉樹トウヒの南限として知られ、山頂部にはトウヒの白骨林が異様な姿をさらしている。論争が続く。トウヒ消滅は人災か、自然現象か。守るべきか、自然に任せるか。

佐渡島・新潟大学演習林　洞爺湖サミットで展示された巨大スギの実物に会いたいと島を訪ねた。冬の厳寒と積雪、夏の雲霧帯によって知られざる山中に樹齢数百年のスギ群落が育まれた。これこそ、稀有な「手付かずの森」かもしれない。

立山・タテヤマスギの森　樹齢 1,000 年から 2,000 年というスギの数は、屋久島をはるかに凌ぐ規模だ。山中には平安時代に伐採された切り株も残る。200 年も前に杣人が剥ぎ取った醜い跡が幹に残っている。スギはけなげに生きている。樹木の生命力には恐れ入るしかない。

魚津市・洞杉の森　魚津の海岸に巨大樹根群が埋没しているのが発見されたのは 1930 年だ。樹種はスギ。同じ森が毛勝三山を源流とする片貝川上流にあった。巨岩を根に抱き洞スギと呼ばれる。異形の姿は迫力満点である。

西表島・マングローブの森　マングローブという種はない。海水と真水が入り混じる河口、汽水域に生きる植物の総称である。潮の干満に耐え、塩分に耐える植物の生態はビックリするものばかりだ。観察も命懸け、満ち潮になると深さはすぐに２ｍを超える。

日本人は森の民である。いまは都会にあって、森の存在を忘れている。だが、日本人の心には森のＤＮＡが息づいているはずである。紹介した 12 の森は、どれも気軽に訪れることはできないだろう。だからこそ、日本の森の多様さ、奥の深さを知ってもらいたいと願って執筆した。

山本、米倉両氏の著書を読んで

日本林政ジャーナリストの会の会員である、毎日新聞の編集委員・山本　悟さん、共同通信ＯＢの米倉久邦さんが相次いで本を上梓した。山本さんは「山のきもち〈森林業が“ほっとする社会”をつくる〉」（東京農大出版会）、米倉さんが「日本の森列伝〈自然と人が織りなす物語〉」（山と渓谷社）。いずれも、森林への愛情と人への優しさに溢れ、かつ、今の森林の立ち位置をリアルに読み取ることもでき、楽しく、面白い。

今年の大学センター試験の現代社会の問題に【森林】をテーマとする設問が出たのは関係者にとってちょっとした話題だった。“山の日”が設定されたというタイミングもあろう。ただ、センター試験は別にして今は、森林を考え、見つめ、語る絶好の機である。混とんとしたこの時期、人間社会の有り様と未来を考える何よりの起爆剤になると思うからだ。森林の効用をここで取り上げでも“木”と密接な住まいの仕事に携わる諸兄には何を「今さら」と笑われてしまうだろう。だが、日本人をして“森の民”であることを認識させることが、人への優しさを育み、多様な寛容の社会をつくることにつながるとしたら、森を語ることのメリットは測り知れないだろう。

“森の民”として日本人は太古の昔から自然と対話してきた。雪形や桜を見て春の訪れを知り農耕を始め、紅葉の色合いの変化に冬ごもりの準備をした。里に獣の気配を見るや、奥山のエサ不良を知り、濁り水が出ると、水源部の荒廃を察知して木を植えてきた。「自然と対話し、山の気持ちをくみ取ると、山は常に応えてくれた」と山本さんは述べ、2012年のインドのハイデラバードＣＯＰ11のスローガン「自然を守れば、自然が守ってくれる」は、日本の里山ではずっと以前から里山の知恵として受け継がれてきたことと語る。

“森は海の恋人”というように、いにしえの時代からヤマと海のつながりの強さは知られるのに、人が自然と対話しなくなり、ヤマを忘れる。とたん、ヤマは脅威となって人を襲う。水害や浸水、漁業不振―。自然と向き合うことを忘れた傲慢で尊大な人間の姿に、山本、米倉の両氏は警鐘を鳴らす。

山本さんは都会と地方の断絶、文明と文化の離反を憂える。ヤマを忘れ、文明の利器に依存しすぎると自然を荒廃させ、一方で自然共生型の里山の知恵を育む地域文化は、人口減少化のもと先細りの運命にさらされている。地域性を問わない文明が都市を発展させるアクセルなら、地域文化は自然荒廃まで突き進む文明のブレーキ役となり得る。どちらが欠けても現代社会は維持できない。「文明と文化をどうつなぐか。その接着剤、橋渡し役となるのが森林であり、木材である」と強調する。

ただ山本さんはいたずらに今の都市と地方、文明と文化の離反を嘆いてはいない。それどころか、むしろ“光明”を見い出している。文明の利器となる機械化や木材の技術開発の進展、増える若者の就業で林業や山村に再生の兆しが見える。都市住民がメンタルケア対策や教育の分野で森林や木材を再評価する動きが広がっている―など。その意味では同書はまさにヤマに目を向ける若者たちや都市住民の応援歌なのだ。応援歌にふさわしい実例も多彩。問題や課題の解決策を理屈でなく、実際の人々の活動を活写することで解決への具体的な道しるべにしている。モノ言わぬ山の気持ちをどこまで理解できるかは当方には自信がないが、いま“ヤマが動いている”ことだけははっきりと分かった。

米倉氏の書は北海道から沖縄までの日本全国の12の森の自然と人が織りなす物語である。南北に長い日本列島は複雑で多様な気候をもたらし、それ故に北から南まで世界のどこにも見られない個性ある森にあふれている。太古の昔から、日本人は森と暮らし、森の恩恵を受けて命をつないできた。人は森にどうかかわってきたのか。それを知らなければ森の本当の姿を知ることにはならない。人とのかかわりのなかで日本の森の魅力をあぶり出そうとの意欲のほとばしりを垣間見ることができる書になっている。

ブナ10万年の彷徨、植えて枯れる辛苦の400年、離島がはぐくんだ神秘の森、巨大すぎ群の謎の生態、埋没林が語る巨木伝説、宗教と国家権力に翻弄される森、汽水域に生きる不思議の樹木――等、目次にある12の森の物語はそれぞれに魅惑的だが、そこに寄り添う人たちの優しさが行間ににじみ出るのは、森に寄せる著者の愛情のなせる業だろう。

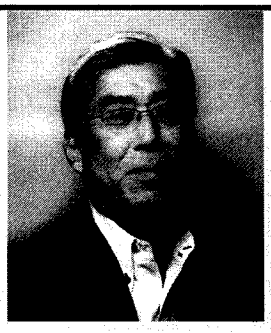
米倉さんが本書の前に著した「60歳からの100名山」もそうであったが、この「日本の森列伝」も、読後にこの12の森に行ってみたい、との誘惑に駆られる。「我こそは“森の子”を実感し、森と対話し、森の豊かさに抱かれたくなる」のだ。

ヤマや森の話を聞いたり、読んだりするだけで、どうしてこうも気分が落ち着き、ほっとするのだろうか。記者仲間の本という嬉しさもフィットンチッド並みのスパイスになっているということか。

（記・古川興一）

記者の目

三大美林・魚梁瀬杉の馬路村
——ピンチをチャンスに



日本林政ジャーナリストの会・幹事
杉本 哲也

一昨年の夏、高知県・馬路村へ取材に出かけた。

高知市内から車でおよそ2時間。右手に太平洋を望みながら、坂本竜馬の銅像で有名な桂浜を経て、緑の山々に囲まれた細く曲がりくねった道を抜けると、突然、眼下に集落が現れた。

高知県の東部、徳島県境に位置し、周囲を1,000m級の山に囲まれた山間地である。

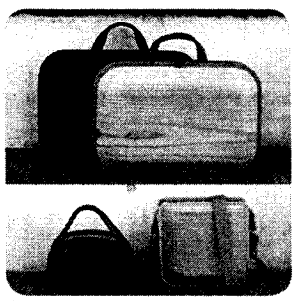
村の総面積165.52㎢のうち、森林が96％を占める。古くから杉の産地と知られ、馬路村の魚梁瀬杉は日本3大美林の一つに数えられている。昭和38年までは2本の森林鉄道が山と海岸を結び、林業や製材業で繁栄していた。

森林の大半を国有林が占め、営林署をはじめ多くの林業関係者が常駐し、「公務員の村」（上治堂司馬路村村長）でもあった。

しかし、木材価格の低迷、林業労働者の高齢化、後継者不足から衰退し、ピーク時には3,500人を数えた人口も900人ほどの規模にまで減少してしまった。

現地に到着し、村を見て回ったが、田畑らしきものは、ほとんど見当たらない。「森林のほか産業の核となるものがないとなれば、村の衰退もやむを得ないのかも」と思わせるに十分な風景だった。

馬路村を衰退の道から救ったのが、江戸時代から村で植えられてきたゆずの活用だった。



全国ブランドに育った「ゆず」（上）
杉を材料にしたバッグ等（右）

昭和40年代半ばから、ゆずの栽培・研究を本格的にスタートさせ、ポン酢醤油「ゆずの村」、安心安全を謳ったゆずジュース「ごっくん馬路村」など、今では全国規模で知られるブランドを育て上げた。ゆず加工食品の売り上げは、年間30億円を超えるまでに成長した。

だが、最初から順調だったわけではない。販売のあてもなく、大量の在庫を抱え込むこともしばしばだった。試行錯誤の結果、「ゆず製品を売るのでなく、馬路村を前面に出し、村ごと売るようにした」（馬路村農協）。

美しい緑の山々、新鮮な空気と水——そこで育った木々やゆずは安全で安心。この「おらが村方式」が消費者の間に浸透していった。

ゆずで築いた「馬路村ブランド」のすそ野を広げたいという思いも強い。その一つが林業振興だ。魚梁瀬杉を材料にしたショルダーバッグや手提げバッグなどの木製品の製造・販売を手掛け、平成18年には、グッドデザイン賞を受賞、話題を呼んだ。

さらに、ゆずを原料とした化粧品の開発にも余念がない。果汁を絞った後のゆずは産業廃棄物として捨てていたが、果皮と種子に美容に有効な成分が多く含まれていることが、最近の研究で明らかになった。

平成22年には、ゆず化粧品工場を建設、翌年から「umaji」ブランドを立ち上げた。

林業衰退という危機を「最大の後押しに」（上治村長）再生の道を歩み出した馬路村。

「ピンチはチャンスなり」——この言葉を噛みしめつつ、桂浜の竜馬像を見上げながら帰路に着いた。

林業の成長産業化と森林吸収源対策が目玉

2017年度林野関連予算は総額約3千億円

CLT（直交集成板）や木質バイオマスにも手厚く配慮

総額97兆4,547億円に上る2017年度政府予算案が昨年12月22日に閣議決定された。農林水産省関連は2兆3,071億円で、このうち林野庁関係予算は2,956億円とやや微増の前年度並み。日本林政ジャーナリストの会は2月16日（木）の定例研究会で、林政課の三上善之予算担当総括課長補佐から新年度林野関係予算のポイントなどについて聞いた。（上松 寛茂）

「長期低迷からの脱出と CO_2 削減」

それによると、依然として続いている林業の長期低迷からの脱出と CO_2 削減を目指す「林業の成長産業化・森林吸収源対策の推進」が目玉事業となっている。

林業の成長産業化では、地域の実情に応じた川上から川下までの取り組みを総合的に支援する昨年度に創設された次世代林業基盤づくり交付金（70億円）により、低コストで効率的な木材の生産・供給を実現させるため、10階建て以上の高層建築も可能なCLT（直交集成板）などを活用した木造建築物の整備により木材の需要拡大を目指す。また、製材工場など木材加工流通施設や苗木生産施設の整備にも補助金を支出する。

さらには新規事業の目玉として、「林業成長産業化地域創出モデル事業」に10億円を盛り込んだ。これは収益性の高い経営を実践している川上から川下までバリューチェーンでつながっている伐採、製材、加工、流通事業者の地域を「林業成長産業化地域」として全国10地域をモデル指定して、地域が提案する明確なビジョンの下での取り組みに対して支援する。ソフトでは1カ所、1,000万円、ハードに対しては同9,000万円を補助する。これにより林業の成長産業化が目に見えるような形で実現させたいと意気込む。

「CLT製造ラインの整備」

未来の新建材として注目を浴びている「CLT利用の促進総合対策」ではCLTなどを活用した先駆的な建築物の建築、大規模・高効率の加工施設におけるCLT製造ラインの整備に支援をする。10億円の補正予算で措置した。

林業を支える担い手の確保や育成では「緑の雇用事業による人材の育成対策事業」に60億円を計上した。これまでずさんさが指摘されてきた森林所有者・境界の明確化や関係者の合意形成に向けて森林整備地域活動支援交付金を交付するほか、改正森林法により創設される林地台帳整備の助けとなる森林GISなどのシステムを整備する「施業集約化の加速化」に9億円を盛り込んだ。

今や国民病とまでいわれる花粉症対策では、花粉の少ない品種を対象とした採種園などの造成・改良、花粉症対策苗木への植え替え、花粉飛散防止剤の実証試験など「花粉発生源対策」に5億円をかけて取り組んでいく。

「バイオマス発電などに必要な木材の安定供給」

阪神淡路大震災や東日本大震災に伴うエネルギー危機で見直されている木質バイオマスの利用拡大（4億円）では、バイオマス発電などに必要な木材の安定供給や熱利用・発電利用でどのような補助事業が使えるかなど全体像を把握して実行に向けた態勢づくりのため、全国調査を実施する。同時に、「新たな木材需要創出総合プロジェクト」（補正措置で12億円）にも組み込まれているボールペンのインクにも活用できるセルロースナノファイバーなどの新たな製品・技術開発の普及・加速化を促す。

「農泊を推進」

今、注目を浴びそうなのが、安倍内閣が大きく掲げている外国人観光客の大幅な受け入れや国内の旅行者の需要拡大による地方創生の受け皿事業がある。これは農水省全体の事業として農山漁村振興交付金（101億円の約半分）で実施する「農泊」を推進する。農泊とは、日本人旅行者だけでなく、外国人観光客も含めて農山漁村の古民家に受け入れ、宿泊して農業や林業、漁業の体験をするのをビジネスとして実施するというのだ。外国人が日本に来て何が見たいかというアンケート調査では、日本の自然、田舎の生活、日本の本当の庶民の姿が見たいというニーズがこの背景にある。

農村振興局が主体となるが、林野庁関係では、京都の嵐山、東山をはじめ、外国人に人気の高い高尾山、北海道のニセコなどの国有林エリアを対象に、山林・山村をパッケージで売り込む。具体的には森林セラピーや山歩きのためのプログラムなどのコンテンツの作成などを支援する。

また、国有林は大きなポテンシャルを持っており、これを十分に発揮させるためには修景伐採をしたり、木道を作ったりするなどして、実際に歩きやすい、外から見て楽しい場所を確保していく必要があるので新たに1億円をかけて整備していく。それをするに当たって国有林の中にリクリエーションの森が千カ所程度あったが、今年4月までに100カ所程度に絞り込み、選定したうえで、これを重点に観光コンテンツを強化していく方針だ。

「シカ柵やシカ狩りを推進」

現在、全国的に深刻化し、社会問題化しているシカによる森林被害では、緊急対策事業として2億円を予算化し、市町村と連携しながら広域かつ緊急的に捕獲や防除を実施していく。シカは全国で300万頭にまで達し、4年で2倍にまで増えるというデータもあり、木の芽を根こそぎ食い荒らし、林業被害だけではなく、農業被害も激増しているという。このため、シカ柵を作ったり、シカ狩りをしたりするなどして強力に対策を進めていく。

このほか、国産材の安定供給体制の構築や地球温暖化防止のための間伐や路網整備、主伐後の再造林を推進する森林整備事業に1,203億円、地震・集中豪雨などに対する山地防災力の強化のための荒廃山地の復旧・予防対策、津波に強い海岸防災林の保全などに597億円を盛り込んだ。

日本林政ジャーナリストの会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル 日本林業協会内
TEL 090-5541-6891 FAX 048-771-3554
禁無断転載